

野間海造 著

「日本の人口と經濟」

小田橋貞壽

日本における人口問題の論議は昨今頗に活潑の度を加へた觀

がある。昭和十六年一月下旬、閣議で「人口政策確立要綱」が決定發表されたこともその動機の一であらう。十六年に入つてからの著書としても岡崎文規博士の「新東亜確立と人口政策」高橋實氏の「東北一農村の醫學的分析」小山榮三氏の「民族と人口の理論」古屋芳雄博士の「國土・人口・血液」田中寛一博士の「日本の人的資源」高橋梵仙氏の「日本人口史之研究」等が擧げられ、こゝに紹介しようと思ふ東京帝大、野間海造教授の「日本の人口と經濟」もその一である。その中、特に本書を紹介する所以は本書が經濟に關説して居り、且つ筆者等の見解に批判を加へられてゐるからである。

本書は四〇七頁の大冊で、結論だけでも實に百廿八頁にわたつてゐる。著者は「はしがき」で自ら「人口學者に非ず。又經濟學者でもない」といひ本書を専門外の仕事と幾度か斷つてゐるが、この大論考を見ると、吾人はその熱意と精力とに敬意を表せざるを得ない。著者は序文によれば農業法、水利立法の専門家である。本書の最も大きな特徴が常に農村との關聯において人口を観察する點にあることはこれからして當然であらう。本書は實に農村人口の流出を中心に日本の人口問題を描き出したものと言ひ得るのであつて、この點においてはやはり東京帝大の渡邊信一教授による「日本農村人口論」と同じ面を扱

書 評

つてゐる。渡邊教授が實に克明に原資料にまで溯つて農村人口の移動といふ一點を研究したのに對し、本書は廣く日本人口問題と稱せられるあらゆる面にまで一應觸れて居るところに特徴がある。

二

本書の内容を簡単に説明し盡すことは、それが量的に厩大であるといふばかりでなく、その扱ふ問題があまりにも多岐多様にわたつてゐるので、限られた紙面では不可能である。しかしその要旨は大凡次の如きものといひ得よう。

第一に日本の人口は現在急激に増加しつゝあるが、これは將來も決して増加の速度を緩めることなく發展する。従つて要職業人口も著増するから、之を如何に地域別に、産業別に配分して行くかゞ大問題である。

第二に將來人口の地域別産業別配分について著者は、

1、農業には養ふ餘地がない。農村では人口が絶對的過剰であつて、増加人口を收容するどころではなく、現在人口の維持すらも不可能な位である。

2、商工業も中小産業としてならば、經濟活動の増大につれて人口收容力を増すが、高度資本の組成下では、機械化の

## 一橋論叢 第九卷 第一號

進歩が却つて人口収容力を低めることになる。

3、そこで海外へ進出することが絶対に必要になる。年々三十萬は少くとも海外へ送出しなければ人口の壓力を緩和することにはならぬ。而して行先は滿洲と南洋とであるが、

兩者へ今後三十年間に一千萬の内地人口を置くやうにしなければ、東亞共榮圈の開發は出来ない。

第三に時局下の現在人口の不足に悩んでゐるが、これに對しては不要不急産業をやめ、工業では出来る限り労働組織を單純化して婦人労働の大動員を行ひ、農業では共同作業、勤勞奉仕等を全國的に組織化する。農業の機械化に對して著者は必ずしも賛成してゐない。なほ戦時下と雖も海外移民は積極的に擴大して行かねばならぬ。

以上は全く本書の要約の要約に過ぎないが、本書を通覽して特徴と思はれる點は第一にまづ先に指摘したる如く農村人口を中心として著者得意の壇場があること、而して日本人口問題の重要な一面が農村に存在するが故に、若し之を中心にして本書が編まれたならば、恐らく類書を壓するに至つたであらう。第二には著者が海外移民にもつ熱意である。滿洲並に南洋へ、特に南洋へ内地人口を送るべきことを強調してゐることである。第三にはその博引傍證である。著者が本書に引用した著書論文

特にその統計表は實に夥しいもので、本書によつて讀者は日本の人口問題論者の加工又は作製した統計を容易に披見し得る便宜に恵まれるであらう。

## 三

本書の立論に關し仔細にわたつて批評を下すことは淺學にして今なし能はないけれども、本書が特に聲を大にして隨所に主張してゐる要職業人口につき若干の愚見を述べることは必要であると思ふ。

野間教授は上田博士が「要職業人口の最大限を將來二十年間位を年々五十萬とし、そのうち主として男子を中心に、三十數萬に職業を保障し得ることを以て最高の目標とせられた」(本書二九四頁)となし、その計算が甚だ過少であつて、實は年々の要職業人口は八十萬に達すると主張されてゐる(二八五頁—二九三頁)。野間教授の意見では、中等學校以上の卒業者が年々六十五萬あり、上級學校に入る者を除いて六十萬、それに小學校を卒業して上級學校へも行かず、家業へも入らないで、他に就職する者が二三十萬あり、これはすべて毎年四月就業すべく社會へ抛り出される人口であり要職業人口である、となすのである。また野間教授は市郡別人口の方面からも推計して八十萬と

いふ數字を出してゐる。

しかし上田博士のいふ要職業人口と野間教授のそれとは全々異つたものである。要職業人口なる語を筆者が最初に用ひた時は「職業に就いてゐることを要望しつゝある人口」を假に要職業人口と呼ぶことにしたのである。(日本人口問題研究第二輯、二九九頁)、同輯にある美濃口氏の論文も拙稿も、かゝる意味において將來の勞働力と當時の失業人口とを推定する基礎としたものであつた。野間教授の解する如く今後新に職に就かんとする人口のみならず、現に就いてゐる者でも、更に又失業してゐる者でも、兎も角職に就いてゐることを必要とする人口が要職業人口である。従つて吾人の用語に従へば要職業人口は決して八十萬には止らず、三千萬、四千萬に上るのである。吾人の問題にしたのはこの人口の年々の「増加數」である。野間教授は要職業人口として求職人口を指してゐるやうだが、若し然りとすれば學校卒業業者や農村からの流出人口のみならず、時々歳歳轉職する者も加へられなければならない。新たに職を求めめるために勞働市場に立ち現れる人口と解すれば、野間教授のいはれる如く八十萬に近いかも知れない。しかし吾人は他方に老齡、死亡その他で職業戦線から退く者もまた決して少くないことを考へるのである。新たに職に就く人口は、まづこの退職者を

補充しなければならぬ。その上に尙ほ職に就き得る人口が幾許の純増加を示すかと考へたとき、吾人はさほど多くを期待し得なかつたのである。若し消耗し行く勞働力を埋め盡して、なほ年々八十萬が全く新たに就職し得るとすれば、勞務動員計畫は現在よりよほど餘裕を生ずるであらう。かくの如く上田博士や吾々は國民總勞働力の増減を問題にしたのであつて、かゝる意味において見れば、たとひ野間教授のいへる如く吾人の推論が如何に大難把なものであつても、何等根本的に是正さるべきものをもつてゐないのである。また野間教授の要職業人口が職業指導所において紹介することを必要とする求職人口となすならばそれは、上田博士の、美濃口氏の、そしてまた筆者の問題とした所ではないのである。

この要職業人口については、野間教授が曾て第二回人口問題協議會で報告し、質問も出で、座長報告でも八十萬の要職業人口の誤解が指摘されてゐる(同報告書四四六頁)のであるが、この新著でも何等省みられるところなく、非難をつゞけてゐる。若し著者が「上田博士の日本人口政策を良き案内書」(序文六頁)として眞に一讀され、三冊の「日本人口問題研究」を参照されたなら、かゝる誤解は生じなかつたと思ふのであるが、これ吾人の甚だ理解に苦しむところであり、恐らく上田博士の迷

## 四

野間教授は、日本人口は現状も將來も過剰なる事を立論の骨子としてゐるやうである。過去においては確かに人的資源は豊富であると信じられてゐたのであるが、聖戰の遂行といふ重荷を負つてみると現状は決して樂觀を許さないのであるまいか。而も將來といへども、現在の人口動態の指示するものは決して野間教授のいへる如くではないと思ふのである。

著者は序文において堂々と「將來人口の推測については上田博士の悲觀的傾向に反對して(二七頁)出生率の遞減は必ずしも決定的ならざるを主張してゐる。而して本文では増田重喜氏の將來人口の無限に發展的なることを紹介し之に左袒するものゝ如くである。悲しいかな筆者は川上理一博士等とともに増田氏の「長編の論文は理解し得ざるものである」(人口問題研究会「人口・民族・國土」昭和十六年、四六頁)けれども、野間教授の本書に引用せる多數の統計を基礎として考へてみても、現状から見た日本人口の將來は決して無限に増加に向ふとは信じられない。そこにこそ人口政策確立要綱の現れる所がある。

思ふのである。若しも著者が、かくの如き政策が實施され、しかもその効果が現れることをも豫測の中にとり入れてゐるのならば、問題はおのづから別である。或は將來無限に増加せしめたいと希望するのであるかどうか。勿論將來を豫測することは難しいが、その豫測は現状の分析から出發しなければならぬ。著者の反對の根據が奈邊に存するのであるか、高教を仰ぎたいのである。

著者の人口過剩觀は轉失業問題にも現れてゐる。著者は日本の紡織工業の従業者を、昭和五年國勢調査有業人口と同十三年工場統計表従業者と比較することにより、百四十九萬から百四萬へと差引四十五萬を減少したといつてゐるが(三六五頁)、本書の他の場所(二二三―二九頁)國勢調査には工場統計表に現れない中小經營の多數存在することを指摘してゐる著者が、何故に本書一九三頁に引用してゐる工場統計表の數字を比較しなかつたのかを惜む。尤も著者は「工場統計は職工五人以上使用工場における調査だが、紡織工業に於ける高度資本の制覇は殆どその全部を工場統計に計上してゐるものと見て差支へあるまい」(三六五頁)といふのだが、大いに差支あることは紡織工業の内容を考へれば明らかであると思ふのである。ともかく著者は産業の根本的編成替によつて多數の轉失業者を出しそれだけ

新就職面の縮小となり、轉失業問題の重大化を論ずる。さきに著者は求職者の群を見て労働市場より去り行く人口を無視したがこゝでは轉失業者として労働市場に現れる人口を重視し、寧ろそれ以上を吸収しようとしてゐる需要の面を輕視してゐる感がある。

右の如くにして、本書は日本の人口過剩論を誘導する。日本人口の真相を深く省察するときは、やはり人口の過剩が結論として出て來ると思ふけれども、著者が誘導した方法ではそれを納得せしめることが難しいといはざるを得ない。日本の人口過剩がこの事變を惹起し、事變の完遂がやがて海外移民を促進せしめるとしても、現状はやはり労働力の不足が強く感ぜられるのである。この現状において農業移民、中小商業移民が果して著者の主張される如く可能であるかどうか疑問なきを得ない。その方式と可能性につき、更に立入つた御示教を仰ぎたいものである。更に日本人の南洋移民能力が最後の結論として述べられてゐるが、吾人は臺灣への農業移民が決して成功してゐない事實を耳にするのである。ハワイの成功とこの不成功との相違がどこにあるか、熱帯移民への適應性について著者の今後の研究に期待したい。

最後に筆者の研究は未だ熟せず、かくの如き大冊に向つて充

分の批判を加へ得るの域に達せざるを遺憾とするものであるが、特に關係せる部分があつたので敢へて短評を試みた次第である。妄言を深く謝すると共に著者の熱意に對し重ねて敬意を表し、今後の御示教を願ふて擱筆する。(昭一六・一一・一五)